

*京都府青少年育成協会会長奨励賞

「広島から世界へ」

京都光華中学校 3年
西 楓 加

2016年5月27日午後6時6分。その瞬間は訪れた。現アメリカ大統領であるオバマ大統領の17分にも及ぶスピーチだ。オバマ氏は日本で開かれた伊勢志摩サミット出席後、内閣総理大臣安倍晋三とともに、広島平和記念公園を訪問し、広島平和記念資料館を10分程度視察後、慰霊碑に献花し、17分にわたって核廃絶に向けた所感を述べた。スピーチを終えたオバマ氏はまっすぐ坪井直さん(91)、森重昭さん(79)という2人の被爆者に歩み寄り、言葉を交わした。私はこの場面をテレビを見て、感動で言葉を失った。アメリカは唯一の原爆使用国であり、現職大統領の被爆地訪問は大きなタブーの1つだった。アメリカ社会では、「原爆投下は、その後の日本本土上陸作戦で失われる多くの米兵の命を救った」という考えが多い。そのため、「謝罪」と受け取られかねない今回の出来事は実現することはないと思われていたのである。

なぜ、このような出来事が実現できたのだろうか。私はオバマ氏を広島に呼び寄せることができたのは、名もなき広島の人々の努力と赦しの心があったからだと思う。被爆者代表で参列された森重昭さんの努力もそのうちの1つだ。ほとんど知られていない原爆による米兵犠牲者の存在。この存在を発掘したのはほかでもない森さんである。森さんがサラリーマン生活のかたわら、20年以上にわたってこつこつと調べつづけたのは、被爆死した12名の米兵のことである。1人1人の名前と遺族を特定して、アメリカの遺族とも接触していく。私には想像もできないくらい大変な作業だったと思う。森さんの執念がなければ成し得なかっただろう。

私の知らないところで、こんなにも努力している人がいたことにとっても驚いた。そのころ地元メディアである広島テレビではある活動を行っていた。広島の人々の平和への思いを「オバマへの手紙」として書いてもらおうというキャンペーンだ。これには、広島県知事、広島市長、被爆者、主婦、子どもたちなど幅広い層からのオバマへの手紙が集まった。驚くことに、そこにはアメリカに対して「謝罪」を求めたり、「恨み」がつづられたものは一通もなかった。そのほとんどが「とにかく広島を見てください。そして核廃絶への一歩を共に踏み出しましょう。」というものだったのである。

原爆によって、今でも苦しんでいる人は数え切れないくらいいる。被爆した方々、身近な大切な人が亡くなった方。それでも、アメリカ側には一切「謝罪」を求めず、核廃絶への一歩を共に踏み出そうという思いは、まさに赦しの心だと私は思う。

「きっとおばあちゃんも天国で喜んでいるだろうな……。」

私はふと思った。実は私の知りあいに被爆者がいる。厳密に言えば、“いた”になるが。私の祖母ではないが、「おばあちゃん。おばあちゃん。」と慕っていた人物だ。そのおばあちゃんは数年前に亡くなった。亡くなる前、おばあちゃんは私にある日のことを教えてくれた。1945年8月6日。忘れてはならないあの日。いきなり空にキノコ雲が現れ、多くの人々を閃光と炎が襲った。知らない人のむごたらしい死体、水を求めて黒い川に飛び込む人々、皮膚が焼かれ、どろどろと引きずりながら歩く人。それはもう「地獄」だったそうだ。爆心地から少し離れたところにいたおばあちゃんは、この日から何十年後に原爆病を発症したという。

おばあちゃんは私に言った。

「私は戦争でたくさん大切な人を失ったし、辛い思いは嫌ってほどした。1度はアメリカを恨んだよ。〈私の大切な人を返してくれ〉って。でも違ったんだよ。戦争は誰か1人が悪いんじゃない。みんなの考え方、心が原因だったんだ、だから、その考え方や心を改めていかないと、何も始まらないんだよ。私はアメリカさんと日本が、もう二度とあんな過ちをおかすことのない平和な世界をつくれたらいいなって思っている。」

って。おばあちゃんは涙を流していた。私も目頭が熱くなった。

私は思う。あの日は決して忘れてはいけない。あの日のことを直接知る人はもう少ないだろう。だからこそ、私たちがその人たちの思いを私たち以降の世代に伝えていく必要がある。恨みの心ではなく、赦しの心を。今回のオバマ氏の訪問は核兵器なき世界の実現への大きな力になるだろう。この出来事に対する人々の思いを少しでも多くの人に知ってもらいたい。「広島から世界へ」本当に実現できればいいなと私は思う。

